

Invariant Subspaces

東北大 教養 大野 芳 希

函数解析の函数論への応用として単位円板上の Hardy 族 H^p の議論がなされている。この函数論の一般の compact 空間への抽象化とは別に Hilbert 空間の vector, 或は von Neumann 代数の元、特に有限次元の行列を値として持つ様な函数の Hardy 族の研究が最近あらわれている。前者は Hilbert 空間上の作用素に対する不変部分空間の問題とも関連しており [3, 4]、後者は非可換積分論への函数環の理論の応用と見ることも出来る [1]。こゝでは前者について最近の結果を紹介する。今の所函数環の理論が明白にあらわれているわけではないが、問題のとりえ方その他に、その考え方が非常に有効である。以下のいくつかの結果は函数環の立場で拡張されている [5, 12]。

§1 Wiener の定理と Beurling-Lax の定理 X を単位円周、 dx を X 上の (正規化した) Lebesgue 測度、 X を $X(e^{i\theta}) =$

$e^{i\theta}$ で定義された X 上の函数とする。 \mathcal{H} を可分 Hilbert 空間とし、 \mathcal{H} の orthonormal basis $\{e_j\}_{j=1}^{\infty}$ とする。

$L^2_{\mathcal{H}}$ を X 上の弱可測な \mathcal{H} -値函数の norm

$$\|F\|_2 = \left\{ \int \|F(e^{i\theta})\|_{\mathcal{H}}^2 d\sigma \right\}^{1/2}$$

が有限なるものの全体の作る Hilbert 空間とする。 Hardy 族 $H^2_{\mathcal{H}}$ を $H^2_{\mathcal{H}} = \{ F \in L^2_{\mathcal{H}} \mid F = \sum_{j=1}^{\infty} f_j e_j, f_j \in H^2(\nu_j) \}$ ($= \{ F \in L^2_{\mathcal{H}} \mid F(e^{i\theta}) \sim \sum_{n=0}^{\infty} \varphi_n e^{in\theta}, \varphi_n \in \mathcal{H} \}$) で定義する。

X 上 a.e. で定義された、 \mathcal{H} の閉部分空間を値として持つ線形函数は値域函数と云う。 a.e. で一致する値域函数は同一のものである。 値域函数 J が可測であるとは \mathcal{H} から $J(e^{i\theta})$ への射影 $P(e^{i\theta})$ が作用素の意味で弱可測なことであり、可測な値域函数 J に対して $\mathcal{M}_J = \{ F \in L^2_{\mathcal{H}} \mid F(e^{i\theta}) \in J(e^{i\theta}) \text{ a.e. } \}$ と定義する。

$L^2_{\mathcal{H}}$ の閉部分空間 \mathcal{M} が invariant であるとは $X\mathcal{M} \subset \mathcal{M}$ なることである。 特に $X\mathcal{M} \subset \mathcal{M}$ なるとき \mathcal{M} は simply invariant であるといふ。 $X\mathcal{M} = \mathcal{M}$ なるとき \mathcal{M} は doubly invariant であるといふ。

定理 1 (Wiener) $L^2_{\mathcal{H}}$ の doubly invariant subspace \mathcal{M} は

$$\mathcal{M} = \mathcal{M}_J$$

の形である。 此処で J は可測な値域函数で一意的である。

定理 2 (Beurling-Lax) $L^2_{\mathcal{H}}$ の simply invariant subspace \mathcal{M} は

$$\mathcal{M} = u H^2_{\mathcal{H}} \oplus \mathcal{M}_J$$

の形である。 此処で J は可測な値域函数、 u は X 上の可測な作

用素函数で値は Hilbert 空間 \mathcal{H} から \mathcal{H} への isometry. その値域は a.e. で J と直交する様なものである. (この \mathcal{H} もある意味で一意的である(命題 7 参照).)

L^2 の simply invariant subspace \mathcal{M} に対して $\bigcap_{n=0}^{\infty} \mathcal{X}^n \mathcal{M} = \{0\}$ とするとき \mathcal{M} は pure であるという. このとき定理 2 の表現は $\mathcal{M} = \mathcal{U} \mathcal{H}_{\mathcal{M}}^2$ となる. 又 $\{F_n\}_{n=1}^{\infty} \subset \mathcal{M}$ が存在して a.e. で $\{F_n(e^{i\theta})\}$ が \mathcal{H} を span するとき \mathcal{M} は full range を持つという.

定理 3 可測値域函数 J が定数次元である. 即ち $\dim J(e^{i\theta}) = N < \infty$ a.e. 又は $\dim J(e^{i\theta}) = \infty$ a.e. である必要十分条件は pure な simply invariant subspace \mathcal{M} が存在して, $\mathcal{M} \in$ 含む最小の doubly invariant subspace を定理 1 で表現したときの値域函数が J であることである.

§ 2 解析的値域函数

Bourling-Lax の定理に表われる二つの函数に注目する. 可測な値域函数 J が解析的であるとは $\{F_n\}_{n=1}^{\infty} \subset H_{\mathcal{H}}^2$ が存在して a.e. で $\{F_n(e^{i\theta})\}$ の closed linear span が $J(e^{i\theta})$ となることである.

定理 4 値域函数 J が解析的なら $\{E_n\}_{n=1}^{\infty} \subset H_{\mathcal{H}}^2$ を適当にとつて a.e. で $\{E_n(e^{i\theta})\}$ が $J(e^{i\theta})$ の正規直交基となる称にできる. 従って J は定数次元である.

解析的値域函数に対して次ぎの称を問題を考へることができる [3].

由題 (1) J が解析的なら J^\perp も解析的か. 又そうなることが出来るか.

(2) 解析的値域函数の和や共通部分は亦解析的か.

(3) \square 解析的な値域函数を同様に定義したとき, 解析的値域函数 J が亦 \square 解析的に在り得るか. 又 J^\perp は \square 解析的か.

解析的値域函数の可付番和が解析的なることは容易に分る.

これらの問題に関して Camburn [2] がいくつかの回答を与えていす.

定理 5 解析的値域函数 J が有限次元なら J^\perp は \square 解析的である ($\dim H = \infty$ でもよい).

系 6 J, K が有限次元の解析的値域函数なら $J \cap K$ も解析的.

(注意) $\dim H = \infty$ とす. (i) 解析的値域函数の共通部分は解析的であるとは限らなす. (ii) J^\perp が一次元の解析的値域函数であるか, \square 解析的でない解析的値域函数 J が存在する ([2], [3]).

§ 3 内部函数

U が unitary 函数であるとは U が X 上の可測な作用素函数で a.e. で $U(e^{i\theta})$ が H 上の unitary 作用素であることである.

unitary 函数 U に対して $UH_{\text{re}}^2 \subset H_{\text{re}}^2$ なるとき U を内部函数という. full range を持つ H_{re}^2 の invariant subspace M が UH_{re}^2 と表現するときは U は内部函数である.

命題 7 $u, v \in \text{unitary 函数}$ とする.

$$(1) \quad uH_{\mathcal{H}}^2 = H_{\mathcal{H}}^2 \Leftrightarrow u: \text{unitary const.}$$

$$(2) \quad uH_{\mathcal{H}}^2 \subset vH_{\mathcal{H}}^2 \Leftrightarrow v^*u: \text{内部函数}$$

unitary 函数 u, v に対して $uH_{\mathcal{H}}^2, vH_{\mathcal{H}}^2$ を含む最小の simply invariant subspace $uH_{\mathcal{H}}^2 \vee vH_{\mathcal{H}}^2$ が $wH_{\mathcal{H}}^2$ と表わせるとき $w = u \wedge v$ と定義する. 又 $uH_{\mathcal{H}}^2 \cap vH_{\mathcal{H}}^2 = wH_{\mathcal{H}}^2$ が full range であるとき $w = u \wedge v$ と定義する. 更に次ぎの符号記号を用いる.

$${}^*N_{\mathcal{H}} = \{u^*v \mid u, v: \text{内部函数}\}, \quad N_{\mathcal{H}}^* = \{uv^* \mid u, v: \text{内部函数}\}$$

命題 8 (1) $u \wedge v: \text{存在} \Leftrightarrow u^*v \in N_{\mathcal{H}}^*$

$$(2) \quad u \vee v: \text{存在} \Leftrightarrow u^*v \in {}^*N_{\mathcal{H}}$$

証明. (1) (ア) $uH_{\mathcal{H}}^2 \cap vH_{\mathcal{H}}^2 = wH_{\mathcal{H}}^2$ ($w: \text{unitary}$) と $uH_{\mathcal{H}}^2, vH_{\mathcal{H}}^2 \supset wH_{\mathcal{H}}^2$ 故命題 7 から u^*w, v^*w は内部函数. このとき $u^*v = u^*w(v^*w)^* \in N_{\mathcal{H}}^*$

(イ) $u^*v = \sigma \tau^*$ ($\sigma, \tau: \text{内部函数}$) とすると $u\sigma H_{\mathcal{H}}^2 = v\tau H_{\mathcal{H}}^2 \subset uH_{\mathcal{H}}^2 \cap vH_{\mathcal{H}}^2$. 従, $\tau H_{\mathcal{H}}^2 \cap vH_{\mathcal{H}}^2$ は full range であるから $u \wedge v$ は存在する. (2) も同様である.

定理 9 $\dim \mathcal{H} < \infty$ のとき $N_{\mathcal{H}}^* = {}^*N_{\mathcal{H}}$

証明. $\sigma \in {}^*N_{\mathcal{H}}$. 即ち $\sigma = u^*v$ ($u, v: \text{内部函数}$) とする.

u の余因数行列の転置行列を ${}^t u$ とすれば ${}^t u = (\det u) \cdot u^{-1}$ であるから

$$(\det u) u^{-1} H_{\mathcal{H}}^2 \subset H_{\mathcal{H}}^2, \text{ 即ち } (\det u) H_{\mathcal{H}}^2 \subset u H_{\mathcal{H}}^2. \text{ 従, } (\det u)(\det v) H_{\mathcal{H}}^2$$

$$\subset u H_{\mathcal{H}}^2 \cap v H_{\mathcal{H}}^2 \text{ 故に } u \wedge v \text{ は存在する. 命題 8 により } \sigma =$$

$u^*v \in N_{\mathcal{H}}^*$. 逆向きの包含関係を示す. $K_{\mathcal{H}}^2 = \{F \in L^2_{\mathcal{H}} \mid F(e^{i\theta}) \sim \sum_{n=-\infty}^{\infty} \varphi_n e^{in\theta}, \varphi_n \in \mathcal{H}\}$ とおく. $K_{\mathcal{H}}^2$ は $H^2_{\mathcal{H}}$ と類似の性質を持つ.

unitary 函数 \bar{u} が共役内部函数であることと $\bar{u}K_{\mathcal{H}}^2 \subset K_{\mathcal{H}}^2$ で定義すれば今までの議論と平行に $\dim \mathcal{H} < \infty$ のとき, 共役内部函数 \bar{u}, \bar{v} に対して $\bar{u}^*\bar{v} = \bar{\pi}\bar{\sigma}^*$ ($\bar{\pi}, \bar{\sigma}$: 共役内部) と書ける. [u : 内部函数 $\Leftrightarrow u^*$: 共役内部函数] 故, 今の場合

$$uv^* = u^{**}v^* = \bar{\pi}\bar{\sigma}^* = \bar{\pi}^{**}\bar{\sigma}^*$$

$\bar{\pi}^*, \bar{\sigma}^*$: 内部函数故 $uv^* \in {}^*N_{\mathcal{H}}$ 依りて $N_{\mathcal{H}}^* = {}^*N_{\mathcal{H}}$.

内部函数 u に対して次ぎの称を scalar の内部函数 g が存在するとき, この g を u の特性内部函数という. (i) $uH^2_{\mathcal{H}} \supset gH^2_{\mathcal{H}}$
(ii) $uH^2_{\mathcal{H}} \supset tH^2_{\mathcal{H}}$ (t : scalar の内部函数) $\Leftrightarrow gH^2_{\mathcal{H}} \supset tH^2_{\mathcal{H}}$.

$f, g \in L^2$, $f = g h, g = g' h'$ (g, g' : unitary, h, h' : 外部函数) に対して $f \vee g = g \vee g', f \wedge g = g \wedge g'$ と定義する.

定理 10 $\dim \mathcal{H} < \infty$ とする. 内部函数 $u = (u_{ij})$ の特性内部函数 g は

$$g = \frac{\det u}{(a_{11} \vee a_{12} \vee \cdots \vee a_{1n}) \vee \cdots \vee (a_{n1} \vee \cdots \vee a_{nn})}$$

ここで (a_{ij}) は u の余因数行列の転置行列.

証明. 簡単のために $\dim \mathcal{H} = 2$ とする. $uH^2_{\mathcal{H}} \supset tH^2_{\mathcal{H}}$ (t : scalar 内部函数) とすると $\forall f, g \in H^2$ に対して $h_1, h_2 \in H^2$ が存在して.

$$u_{11}h_1 + u_{12}h_2 = tf, \quad u_{21}h_1 + u_{22}h_2 = tg$$

$$\text{従って } (h_1 =) \frac{t(u_{22}f - u_{12}g)}{\det U}, \quad (h_2 =) \frac{t(u_{11}g - u_{21}f)}{\det U} \in H^2$$

($\forall f, g \in H^2$)

$$\text{故に } (u_{22}H^2 + u_{12}H^2) \subset \frac{\det U}{t} H^2, \quad \text{従って } u_{22} \vee u_{12} \text{ は存在して}$$

$$(u_{22} \vee u_{12}) H^2 \subset (\det U / t) H^2. \quad \text{同様に } (u_{11} \vee u_{21}) H^2 \subset (\det U / t) H^2.$$

$$\text{従って } \{ (u_{22} \vee u_{12}) \vee (u_{11} \vee u_{21}) \} H^2 \subset (\det U / t) H^2. \quad \text{故に}$$

$$t H^2 \subset \{ \det U / (u_{22} \vee u_{12}) \vee (u_{11} \vee u_{21}) \} H^2$$

依って t が U の特性内部函数である必要十分条件は

$$\det U = t \{ (u_{22} \vee u_{12}) \vee (u_{11} \vee u_{21}) \}.$$

特性内部函数が存在するとは限らないので次ぎの存在問題を考える。 $H_{\mathbb{C}}^2$ の invariant subspace \mathcal{M} が all (analytic) directions を含むとは $[F \in H_{\mathbb{C}}^2 \Rightarrow \exists f: \text{scalar ft. } fF \in \mathcal{M}]$ なることである。

問題 $H_{\mathbb{C}}^2$ の invariant subspace $\mathcal{M} = UH_{\mathbb{C}}^2$ が all directions を含めば、 $\mathcal{M} \cap H_{\mathbb{C}}^2$ は scalar 内部函数 g が、従って内部函数 U の特性内部函数が存在するか。

現在の所まだ満足できる答は与えられていない。得られている結果は次ぎの存在問題である。

定理 11 任意の $e \in \mathcal{H}$ に対して $g \circ e \in \mathcal{M}$ なる有限 Blaschke 積 g_e が存在するならば $\mathcal{M} \cap H_{\mathbb{C}}^2$ は scalar 内部函数 g が存在する。

$F \in H_{\mathbb{C}}^2$ に対して J を F の正値域函数とする。このとき

§4

$H^2_{\mathcal{H}} \cap M_{\mathcal{H}} = E \cdot H^2$ ($E \in H^{\infty}_{\mathcal{H}}$, $\|E(u^0)\| = 1$ a.e.) と書ける. この E を F に対する unitary 外部函数という. 定数函数 $e \in \mathcal{H}$ に対する unitary 外部函数 E に対して $g[e] \in g[E] \cdot E \in \mathcal{M}$, 且 $\{g[E] \in \mathcal{M} \mid g H^2 \subset g[E] H^2\}$ なる内部函数とする.

補題 12 一次独立な $y_1, y_2 \in \mathcal{H}$ に対して $g[y_1], g[y_2]$ は有限 Blaschke 積であるとする. $g[f] = g[y_1] \wedge g[y_2]$ なる一次結合 $f = ay_1 + by_2$ が存在する.

証明. y_1, y_2 の作る空間を \mathcal{H}_0 とし $\mathcal{M} \cap H^2_{\mathcal{H}_0} = U H^2_{\mathcal{H}_0}$ とすると $U = (f_{ij})$ (\mathcal{H}_0 上 unitary) \mathcal{H}_0^{\perp} 上 0 である. $f = ay_1 + by_2$ に対して $\{g f \in \mathcal{M} \mid \exists g_1, g_2 \in H^2\}$

$$\left[\begin{pmatrix} f_{11} & f_{12} \\ f_{21} & f_{22} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} g_1 \\ g_2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} ag \\ bg \end{pmatrix} \right]$$

従って $g f \in \mathcal{M}$ なら $g(a f_{22} - b f_{12}) / \det U, g(-a f_{21} + b f_{11}) / \det U \in H^2$.

依って $(\det U) H^2 \supset g(a f_{22} - b f_{12}) H^2, (\det U) H^2 \supset g(-a f_{21} + b f_{11}) H^2$

従って $(\det U) H^2 \supset g \{ (a f_{22} - b f_{12}) \vee (-a f_{21} + b f_{11}) \} H^2$

故に $g[f] = \det U / \{ (a f_{22} - b f_{12}) \vee (-a f_{21} + b f_{11}) \}$

特に $g[y_1] = \det U / f_{22} \vee f_{21}, g[y_2] = \det U / f_{12} \vee f_{11}$

定理 10 から U の特性内部函数 g は

$$g = \det U / (f_{11} \vee f_{12} \vee f_{21} \vee f_{22}) = g[y_1] \wedge g[y_2]$$

$g[y_1], g[y_2]$ は有限 Blaschke 積故 g も有限 Blaschke 積也. 従って

$g^2 H^2 \subset (\det U) H^2 \subset g H^2$ 故 $\det U$ も亦有限 Blaschke 積である.

今 $f = y_1 + by_2$ に対して $g[f] \neq g$ とすると、或る有限 Blaschke 積 p が存在して $(f_{22} - bf_{12}) \vee (-f_{21} + bf_{11}) \in \text{divide } p$ 一方 $f_{11} \vee f_{12} \vee f_{21} \vee f_{22}$ は divide しない。 $p \in$ 各因子に分けて考えれば或る $|\lambda| < 1$ と整数 k が存在して $(z - \lambda / (1 - \bar{\lambda}z))^k$ は $f_{22} - bf_{12}$, $-f_{21} + bf_{11}$ $\in \text{divide}$ するが $f_{11}, f_{12}, f_{21}, f_{22}$ の何れも divide しない。従って例えば $f_{12}^{(k)}(z) \neq 0$ とすればこのとき $b = f_{22}^{(k)}(z) / f_{12}^{(k)}(z)$ 。この b は有限位しかない。従って $g[f] \neq g$ なる $f = y_1 + by_2$ は有限位。

定理 11 の証明。仮定から各 $e \in \mathcal{M}$ に対して $g[e]$ は有限 Blaschke 積になる。 $\mathcal{M}_n = \{e \in \mathcal{M} \mid g[e] \text{ の零点の位数 (重複度を数える) が } n \text{ 以下}\}$ とおくと \mathcal{M}_n は閉集合である。実際 $\mathcal{M}_n \ni f_m \rightarrow e$ とし、

$$g[f_m](e^{i\theta}) = \left(\frac{e^{i\theta} - \lambda_{m_1}}{1 - \bar{\lambda}_{m_1} e^{i\theta}} \right) \cdots \left(\frac{e^{i\theta} - \lambda_{m_n}}{1 - \bar{\lambda}_{m_n} e^{i\theta}} \right)$$

とおく。 $|\lambda| < 1$ に対して $1 / (1 - \bar{\lambda} e^{i\theta})$ は外部函数だから

$$(e^{i\theta} - \lambda_{m_1}) \cdots (e^{i\theta} - \lambda_{m_n}) f_m \in \mathcal{M}$$

必要なら部分列を取って $\lambda_{m_1} \rightarrow \lambda_1, \dots, \lambda_{m_n} \rightarrow \lambda_n$ とする。このとき

$$(e^{i\theta} - \lambda_1) \cdots (e^{i\theta} - \lambda_n) e \in \mathcal{M}$$

故に j に対して $|\lambda_j| < 1$ なら有限 Blaschke 積 g :

$$g(e^{i\theta}) = \left(\frac{e^{i\theta} - \lambda_1}{1 - \bar{\lambda}_1 e^{i\theta}} \right) \cdots \left(\frac{e^{i\theta} - \lambda_n}{1 - \bar{\lambda}_n e^{i\theta}} \right)$$

に対して $g \in \mathcal{M}$ 。従って $g[e]$ の零点の位数は n 以下。故に $e \in \mathcal{M}_n$ 。

$(|\lambda_j| = 1 \text{ なる } j) \text{ が あるときは } e^{i\theta} - \lambda_j \text{ は外部函数故にその数 } k \text{ に応}$

$\bar{U} \cap e \in M_{m \times k} \subset M_n$. Baire の定理によりある m_k 近球 $\{x: \|x_0 - x_0\| < \varepsilon\}$

 を含む. $y \in Y_e$ に対して $x_0 + \frac{\varepsilon}{\|y\|} y \in m_k$ だから $y \in m_{2k}$. 従って補題

 12 により任意の n に対して $g[x_n] = g[e_1] \wedge \cdots \wedge g[e_n]$ なる x_n が

 存在する. このとき $g[x_1]H^2 \supset g[x_2]H^2 \supset \cdots$ だから $Y_e = m_{2k}$

 より或る x_{n_0} に対して $g[x_{n_0}] = g[x_{n_0+1}] = \cdots$. 故に $\bigcap_{j=1}^{\infty} g[e_j]H^2 =$

 $g[x_{n_0}]H^2$. 従って $m \supset g[x_{n_0}]H_{ge}^2$.

定理 13 $\dim Y_e < \infty$, U : 内部函数なら $UH_{ge}^2 = VH_{ge}^2 \cap WH_{ge}^2$

且 $\det U = (\det V)(\det W)$, $\det V$: Blaschke, $\det W$: singular なる

 内部函数 V, W が存在する.

§ 4 Invariant subspaces

問題 Y_e ($\dim Y_e > 1$) 上定義された有界線型作用素 T は $T Y_e$

 $\subset Y_e$. 且 $\{0\} \neq Y_0 \neq Y_e$ なる閉部分空間 Y_0 を持つか.

これは T の invariant subspace の問題である. (i) $\dim Y_e < \infty$ の

 ときは答は肯定的. 実際 T は固有 vector を持つが, これは一次

 元の invariant subspace を作る. (ii) $\dim Y_e > \infty$ のときは肯定的.

 このときは $0 \neq \varphi \in Y_e$ なる φ に対して $\{T^n \varphi\}_{n=0}^{\infty}$ の closed linear

 span を考えればよい.

推移作用素 $S \in S: H_{ge}^2 \rightarrow \sum_{n=0}^{\infty} \varphi_n X^n \rightarrow \sum_{n=0}^{\infty} \varphi_n X^{n+1} = X \left(\sum_{n=0}^{\infty} \varphi_n X^n \right)$

 で定義し, H_{ge}^2 に於ける S の共役作用素 S^* とする:

$$S^*: H_{ge}^2 \rightarrow \sum_{n=0}^{\infty} \varphi_n X^n \rightarrow \sum_{n=0}^{\infty} \varphi_{n+1} X^n.$$

H_{ge}^2 の閉部分空間 K と $M = H_{ge}^2 \ominus K$ に対して $S^* K \subset K$ と

$\beta M \subset S$ とは同値. 従って $\{0\} \subsetneq M \subsetneq \mathcal{H}$ なる β^* -invariant subspace M が見つけられること $\Leftrightarrow M \subsetneq M_0 \subsetneq H_{\mathcal{H}}^2$ なる (β^*) -invariant subspace M_0 が見つけられること \Leftrightarrow は同値である.

以下に於いて $T \in \mathcal{H}$ $\|T\| < 1$ なる \mathcal{H} 上の有界線型作用素とし、対応 $A: \mathcal{H} \rightarrow H_{\mathcal{H}}^2$ を

$$A: \mathcal{H} \ni \varphi \rightarrow F_\varphi = \sum_{n=0}^{\infty} (T^n \varphi) \chi^n = (I - T^* T)^{-1} \varphi \in H_{\mathcal{H}}^2$$

で定義する. $\mathcal{K}_T = A\mathcal{H}$ とおくと A は \mathcal{H} から $H_{\mathcal{H}}^2$ の閉部分空間 \mathcal{K}_T の上への位相同型対応で $A T = S^* A$, 即ち S^* と T は unitary 同値. $M_T = H_{\mathcal{H}}^2 \ominus \mathcal{K}_T \in T$ の Rota 空間という [7].

T の invariant subspace の存在性の問題が positive である必要十分条件は T の Rota 空間 M_T が極大でない, 即ち $H_{\mathcal{H}}^2 \supsetneq M_0 \supsetneq M_T$ なる invariant subspace M_0 が存在することである.

定理 14 $H_{\mathcal{H}}^2$ の invariant subspace M が余次元 1 を持つ必要十分条件は或る $|\lambda| < 1$ と $\varphi_0 \in \mathcal{H}$ ($\varphi_0 \neq 0$) に対して $M = \{F \in H_{\mathcal{H}}^2 \mid F(\bar{\lambda}) \perp \varphi_0 \text{ in } \mathcal{H}\}$ と表わせることである.

証明. $\mathcal{K} = H_{\mathcal{H}}^2 \ominus M$ とおくと $\dim \mathcal{K} = 1$ とするとき $0 \neq \psi \in \mathcal{K}$, $\psi = \sum_{n=0}^{\infty} \varphi_n \chi^n$ とすれば、 $S^* \psi \in \mathcal{K}$ 故 $\lambda \in \mathbb{C}$ が存在して

$$S^* \psi = \sum_{n=0}^{\infty} \varphi_{n+1} \chi^n = \lambda \sum_{n=0}^{\infty} \varphi_n \chi^n$$

故に $\varphi_{n+1} = \lambda \varphi_n$ ($\forall n \geq 0$) 従って $\varphi_n = \lambda^n \varphi_0$ ($\forall n \geq 0, \varphi_0 \neq 0$). $\psi = (\sum_{n=0}^{\infty} \lambda^n \chi^n) \varphi_0 \in H_{\mathcal{H}}^2$ なるから $|\lambda| < 1$. 従って $\psi = \varphi_0 / (1 - \lambda \chi)$.

逆に $(\lambda) < 1$, $\varphi_0 \in \mathcal{H}$ と 3 組に対して $\varphi = \varphi_0 / (1 - \lambda X)$ とおき $\mathcal{K} = \{a\varphi \mid a \in \mathbb{C}\}$ とおくと \mathcal{K} は S^1 -invariant な 1 次元空間である。
 すると $F \in \mathcal{M} \Leftrightarrow$

$$0 = \int (\varphi, F) d\sigma = \int (\varphi_0, (1 + \bar{\lambda}X + \bar{\lambda}^2 X^2 + \dots) F) d\sigma$$

$$F = \sum_{n=0}^{\infty} \bar{\lambda}^n \psi_n \text{ 故}$$

$$0 = \int (\varphi, F) d\sigma = (\varphi_0, \sum_{n=0}^{\infty} \bar{\lambda}^n \psi_n) = (\varphi_0, F\bar{\omega})$$

換言すれば $F \in \mathcal{M} \Leftrightarrow F(\bar{\lambda}) \perp \varphi_0$ in \mathcal{H} .

定理 15 $H_{\varphi_0}^2$ の invariant subspace \mathcal{M} が極大で且 $\varphi_0 \in \mathcal{M}$ のとき \mathcal{M} の φ_0 による orthogonal complement \mathcal{M}^\perp は φ_0 の single Blaschke factor に等しい。

証明. $\varphi_0 \in \mathcal{M}$ が極大に存在するから scalar-internal function g をとる。
 g が single factor であるならば $g = pr$ (p, r は定数でない内部函数) と書ける。
 $\mathcal{M}' = \{F \in H_{\varphi_0}^2 \mid pF \in \mathcal{M}\}$ とおくと $\mathcal{M} \subset \mathcal{M}' \subset H_{\varphi_0}^2$. $\mathcal{M}' = H_{\varphi_0}^2$ ならば $pH_{\varphi_0}^2 \subset \mathcal{M}$ となり g の極大性に反する。
 $\mathcal{M} = \mathcal{M}'$ ならば $F \in rH_{\varphi_0}^2$ なる $F \notin \mathcal{M}$ を選べば $pF = pr(\bar{r}F) = g(\bar{r}F) \in gH_{\varphi_0}^2 \subset \mathcal{M}$ 故に $F \in \mathcal{M}' = \mathcal{M}$ となり矛盾である。
 故に g は single factor の勿論特異でないから Blaschke factor である。依りて $g(z) = (z - \lambda) / (1 - \bar{\lambda}z)$ と書ける。
 $\tau: \mathcal{H} \rightarrow \mathcal{H}; F \in H_{\varphi_0}^2 \rightarrow F(\lambda) \in \mathcal{H}$ なる対応をとる。
 $\tau(\mathcal{M}) = \mathcal{H}$ は内部分空間で、 $\tau(gH_{\varphi_0}^2) = \{0\}$. \mathcal{H}' が \mathcal{H} の内部分空間ならば $\tau^{-1}(\mathcal{H}')$ は invariant で、対して $\tau^{-1}(\mathcal{H}') \longleftrightarrow \mathcal{H}'$ は $H_{\varphi_0}^2$ の $gH_{\varphi_0}^2$ を含む invariant subspace と \mathcal{H} の内部分空間との間の 1-1

対応を与えらる。従て、極大な M に対応する \mathcal{H}_0 は \mathcal{H} の部分空間として極大でなければならず、このとき $\text{codim } \mathcal{H}_0 = 1$ 故 $\text{codim } M = 1$.

系 16 M が極大で $\text{codim } M \neq 1$ ならば各 $F \in M$ に対応する unitary 外部函数 E は M に属する。

証明. $F \in E \cdot H^2$ 故 $F = g \cdot h E$ (g : 内部, h : 外部函数) と書ける。 h が外部函数だから $gE \in M$. 今 $N = \overline{g}M \cap H_{gE}^2$ とおくと $M \subset N \subset H_{gE}^2$. $N = H_{gE}^2$ ならば $\overline{g}M \supset H_{gE}^2$ 故 $M \supset gH_{gE}^2$ となり、定理 15 から $\text{codim } M = 1$. これは矛盾で、従て $M = N$ 故 $E = \overline{g}gE \in M$.

定理 17 M が極大ならば $E \in H_{gE}^2$, $\|E(e^{i\theta})\| = 1$ a.e. が存在して

$$M = \{ F \in H_{gE}^2 \mid (F, E) \in H^2 \}$$

証明. $M = \cup H_{gE}^2$ とする。凡ての $e \in \mathcal{H}$ に対して ue が定数ならば $M = H_{gE}^2$ となる。従て $ue = E$ が定数でない u なる $e \in \mathcal{H}$, $\|e\| = 1$ が存在する。今 \mathcal{H} の base $\{e_j\}$ と $e = e_1$ とする様にすれば

$$u = \begin{pmatrix} k_1 \\ k_2 \\ \vdots \\ * \end{pmatrix}$$

とおくと $E = ue = \sum_{j=1}^{\infty} k_j e_j$. 所て明らかには $M \subset M_{(E)} \subset H_{gE}^2$. 此故て $M_{(E)} = \{ F \in H_{gE}^2 \mid (F, E) \in H^2 \}$. $M_{(E)} = H_{gE}^2$ ならば $\forall F \in H_{gE}^2$, $F = \sum_{j=1}^{\infty} f_j e_j$ に対して $(F, E) = \sum f_j \overline{k_j} \in H^2$. 従て $\overline{k_j} \in H^2$ ($\forall j \geq 1$) 故に k_j は \mathbb{R} 上定数となり、これは E が定数でないという事に反する。故に $M = M_{(E)}$.

あとで見れば \mathcal{H} の Rota 空間 $M_{\mathcal{H}}$ は full range である。故に

$M_\pi = U_\pi H_{\mathbb{C}}^2$ (U_π : 内部函数) と表現できる. 従って $M_\pi \subset M_0 \subset H_{\mathbb{C}}^2$ 存在 invariant subspace M_0 が存在する必要十分条件は $U_\pi = V \cdot W$ (V, W : 定数でない内部函数 - 但し $\text{codim } M_\pi = 1$ のときは(定数で)

よい) の factorization が出来ることである. 従って π の invariant subspace の存在性の問題は内部函数, 特に Rota 空間 M_π と表現する内部函数 U_π (これ π の Rota 内部函数という) の factorization の問題に帰着される. この問題に就いては [3, 4] に詳しい.

定理 18 $\dim \mathcal{H} < \infty$ とする. $\text{codim } M > 1$ ならば M は極大でない. 或は同値だが, 自明な場合を除いて内部函数は factorization できる.

§5 Rota 空間と Potapov 空間.

命題 19 $M_\pi = \{ F \in H_{\mathbb{C}}^2 \mid F = \sum_{n=0}^{\infty} \varphi_n \chi^n, \sum_{n=0}^{\infty} (\pi^*)^n \varphi_n = 0 \}$

定理 20 $M_\pi = (\chi - \pi^*) H_{\mathbb{C}}^2$

証明. 定義から $M_\pi = \{ F \in H_{\mathbb{C}}^2 \mid \int (F, (1 - \chi\pi)^{-1} e) d\sigma = 0 \ \forall e \in \mathcal{H} \}$. $F \in M_\pi$ に対して $G \equiv (1 - \chi^{-1}\pi^*)^{-1} F \in H_{\mathbb{C}}^2$ 存在 $\chi^{-1}G \in H_{\mathbb{C}}^2$ 故に $F = (\chi - \pi^*) \chi^{-1}G \in (\chi - \pi^*) H_{\mathbb{C}}^2$. $G \in H_{\mathbb{C}}^2$ を示す. $G = \sum_{n=0}^{\infty} \varphi_n \chi^n$ とすると $F = (1 - \chi^{-1}\pi^*)G = \sum_{n=0}^{\infty} (\varphi_n - \pi^* \varphi_{n+1}) \chi^n$, $F \in H_{\mathbb{C}}^2$ 故 $\varphi_n = \pi^* \varphi_{n+1}$ ($n = -1, -2, \dots$). $\therefore F \in M_\pi$ から $(\varphi_0, e) = \int (G, e) d\sigma = \int ((1 - \chi^{-1}\pi^*)^{-1} F, e) d\sigma = 0 \ (\forall e \in \mathcal{H})$ 故に $\varphi_0 = 0$. 従って $\varphi_{-1} = \pi^* \varphi_0 = 0$, $\varphi_{-2} = \pi^* \varphi_{-1} = 0, \dots$. 故に $G \in H_{\mathbb{C}}^2$. 逆向きの包含関係は容易である.

系 21 M_T は full range である。

系 22 T が正規作用素なら $U_T = (X - T^*)(1 - XT)^{-1}$

証明. T が正規であるから $(X - T^*)(1 - XT)^{-1}$ は unitary である。

勿論内部函数となる。 $(1 - XT)^{-1} H_{T^*}^2 = H_{T^*}^2$ となるから定理 20 から

ら $M_T = (X - T^*) H_{T^*}^2 = (X - T^*)(1 - XT)^{-1} H_{T^*}^2$.

命題 23 $U_T = U_0 + X(1 - XT)^{-1} U_1$ 此処で U_0, U_1 は定数作用素。

定理 24 $\dim \mathcal{H} = N < \infty$ とする。 T^* の特性多項式を $\prod_{j=1}^N (z - \lambda_j)$

とすると

$$\det U_T(e^{i\theta}) = \prod_{j=1}^N \frac{e^{i\theta} - \lambda_j}{1 - \bar{\lambda}_j e^{i\theta}}$$

証明. 定理 20 から $U_T H_{T^*}^2 = (e^{i\theta} - T^*) H_{T^*}^2$. 従って $\{\det(e^{i\theta} - T^*) / \det U_T\}$ は H^∞ の invertible element、故に外部函数。 $\det(e^{i\theta} - T^*)$ は T^* の特性多項式である。外部函数は零点又は極を円板内に持つから $\det U_T$ と $\det(e^{i\theta} - T^*)$ は同じ重複度の零点を持つ。この保存性値を持つ内部函数は $\prod_{j=1}^N \frac{e^{i\theta} - \lambda_j}{1 - \bar{\lambda}_j e^{i\theta}}$ の絶対値 1 の定数倍だけである。

定理 25 $\dim \mathcal{H} < \infty$ とし、 T^* の最小多項式を $\prod_{j=1}^r (z - \lambda_j)$ とする。

U_T の特性内部函数は

$$q(e^{i\theta}) = \prod_{j=1}^r \frac{e^{i\theta} - \lambda_j}{1 - \bar{\lambda}_j e^{i\theta}}$$

証明. $\prod_{j=1}^r (1 - \bar{\lambda}_j e^{i\theta})^{-1}$ は外部函数だから $q H_{T^*}^2 = \prod_{j=1}^r (e^{i\theta} - \lambda_j) H_{T^*}^2$.

まず $M_T \supset \mathcal{H} H_{T^*}^2$ を示す。 $\sum \varphi_n x^n$, $\sum \|\varphi_n\|^2 < \infty$ に対して

$\prod_{j=1}^r (z^{i_0} - \lambda_j) \sum_{n=0}^{\infty} a_n e^{in_0} \in M_T$ を示せばよい. M_T は invariant 故この
 ためには $\forall \varphi$ に対して $\prod_{j=1}^r (z^{i_0} - \lambda_j) \varphi \in M_T$ を示せばよい. 命題 19
 によりこのことは $\sum_{n=0}^{\infty} a_n (T^*)^n \varphi = 0$ と同値である (但し $\prod_{j=1}^r (z^{i_0} - \lambda_j)$
 $= \sum_{n=0}^{\infty} a_n z^{in_0}$ とおいた). 故に $\sum a_n e^{in_0}$ は T^* の最小多項式故これ
 は成り立つ. 従って $M_T \supset \mathcal{H}_{T^*}^2$. 今 $M_T \not\supset p \mathcal{H}_{T^*}^2 \supset \mathcal{H}_{T^*}^2$ (p : scalar
 内部函数) とすると p は有限 Blaschke 積でなければならぬ.
 $p(z^{i_0}) = \prod_{j=1}^k \frac{z^{i_0} - \beta_j}{1 - \bar{\beta}_j z^{i_0}}$ ($k \leq r$) とおく. このとき $\prod_{j=1}^k (1 - \bar{\beta}_j z^{i_0})^{-1}$ は外
 部函数故 $M_T \not\supset p \mathcal{H}_{T^*}^2 = \prod_{j=1}^k (z^{i_0} - \beta_j) \mathcal{H}_{T^*}^2$. 特に $\forall e \in \mathcal{H}_{T^*}^2$ に対して
 $\prod_{j=1}^k (z^{i_0} - \beta_j) e \in M_T$. 命題 19 により $\prod_{j=1}^k (T^* - \beta_j) = 0$. 故に $\prod_{j=1}^r (z^{i_0} - \lambda_j)$
 が T^* の最小多項式故 $k=r$ となり結局 $p=q$.

Rota 空間の応用の一つとして次節の命題を挙げておく.

命題 26 $\dim \mathcal{H}_{T^*} = \infty$ ならば full range を持つ $\mathcal{H}_{T^*}^2$ の disjoint な
 invariant subspaces の uncountably family $\{M_\alpha\}$ が存在する.

証明. T^* の Rota 空間 M_{T^*} は $\mathcal{H}_{T^*}^2$ の full range を持つ invariant
 subspace である. 更に T, U が disjoint な値域を持つ 相互 1-1 有界線型
 作用素ならば $M_{T^*} \cap M_{U^*} = \{0\}$. 従って $\{ \}$ 作用素の uncountably
 family を示せばよいが, これは容易である.

Potapov [6] によれば T に関連するもう一つの内部函数が
 ある

$$U_T(z^{i_0}) = (1 - T^* T)^{-\frac{1}{2}} (z^{i_0} - T^*) (1 - \chi T)^{-1} (1 - T T^*)^{\frac{1}{2}}$$

は内部函数である. この U_T は Potapov 内部函数と $U_T \mathcal{H}_{T^*}^2 \in$

Potapov 空間という。これは $B; \mathcal{H} \ni e \rightarrow \mathcal{H}_e =$

$$(1-T^*T)^{-1} \sum_{n=0}^{\infty} (T^n e) \chi^n \in \mathcal{H}_e \quad \text{なる対応を考えると}$$

$$\mathcal{V}_T \mathcal{H}_e = \mathcal{H}_e \oplus B\mathcal{H} \quad \text{なる空間で、} T \text{ についての}$$

invariant subspace の存在性の問題は T の Potapov

空間が \mathcal{H}_e の invariant subspace として極大でない

ということと同値になる。系 22 から T が正規作用素なら

その Rota 空間と Potapov 空間は一致する。更に

定理 27 $\dim \mathcal{H} = N < \infty$ なら $\det U_T = \det V_T$ であり、且つ U_T と

V_T の特性内部函数は同一である。

$$\text{証明. } \det V_T = \det (1 - T^*T)^{-1/2} \det (\chi - T^*) \det (1 - \chi T)^{-1} \det (1 - T T^*)^{1/2}$$

最初と最後の因子は定数であり、中央の因子は T^* の特性多項式。

中央の因子は

$$\det (\chi (\chi^{-1} - T)^{-1}) = \chi^{-N} \left[\prod_{j=1}^N (\chi^{-1} - \bar{\lambda}_j) \right]^{-1} = \prod_{j=1}^N (1 - \chi \bar{\lambda}_j)^{-1}$$

最初の主張が定理 24 から従う。 $\mathcal{V}_T \mathcal{H}_e = (1 - T^*T)^{-1/2} \mathcal{U}_T \mathcal{H}_e$ であるから

$[\mathcal{V}_T \mathcal{H}_e \supset \mathcal{H}_e \Leftrightarrow \mathcal{U}_T \mathcal{H}_e \supset \mathcal{H}_e]$ であるから後半の主張が出る。

定理 28 Rota 空間 \mathcal{M}_T (或は Potapov 空間) が all directions

を含む必要十分条件は T が polynomial equation $P(T) = 0$ を満

足すことである。

定理 3 は [12], 定理 28 は [11] に証明がある。その他の証明を

省略した定理の証明は [3] で与えられている。此処で与えた証

91

明は [4, 8, 9, 11] 等による。作用素函数の factorization の問題は [3], 内部函数に就いての他の結果は [10] 等に見られる。

文献

- [1] W. B. Arveson; Analyticity in operator algebras, Amer. Journ. Math., 89 (1967) 578-642.
- [2] M. Cambern; Analytic Range Functions, Journ. Math. Anal. & Apply., 12 (1965) 413-424.
- [3] H. Helson; Lectures on Invariant Subspaces, Academic Press, N.Y., 1964
- [4] _____; Sous-Espaces Invariants, Publications Mathématiques d'Orsay, Année 1966-67.
- [5] Y. Ohno; Simply invariant subspaces, Tohoku Math. Journ., 19 (1967), 368-378.
- [6] V. P. Potapov; The multiplicative structure of J -contractive matrix functions, Amer. Math. Soc. Transl. 15 (1960), 131-245.
- [7] G.-C. Rota; Note on the invariant subspaces of linear operators, Rendiconti del Circolo Matematico di Palermo (2) 8 (1959), 182-184.
- [8] M. J. Sherman; Operators and Inner Functions, Pacific Journ. Math., 22 (1967) 159-170.

- [9] _____; Disjoint Invariant Subspaces, to appear.
- [10] _____; A spectral theory for inner functions, to appear.
- [11] _____; Invariant subspaces containing all analytic directions, to appear.
- [12] T.P. Srinivasan; Doubly invariant subspaces, Pacific Journ. Math., 14 (1964) 701-707.